

看護学生の高齢者理解を深めるための教育方法

—在宅高齢者へのインタビューからの学び—

吉本知恵*, 横川絹恵, 一原由美子

香川県立医療短期大学看護学科

Educative Method of Deepening Nursing Students' Understanding of the Aged

—Learning from Interviews of Home-Residing Aged People—

Chie Yoshimoto*, Kinue Yokogawa, Yumiko Ichihara

Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

The objective of this study is to elucidate the effects of learning by interviewing to understand people of advanced age.

Fifty first-year students in the Nursing Department of A Junior College interviewed home-residing aged people and wrote papers on what they learned. Analysis of their reports resulted in the following :

- (1) The students were impressed with the aged when they realized that aged people have mature senses of values based on their past experiences and lead active and positive lives. The students recognized aged people's roles and significance of existence. They also understood individuality of each aged person.
- (2) The students' interests in the aged were increased.
- (3) To know the past experiences of the aged is effective for understanding their ways of life and senses of values.
- (4) The students' attentions were turned to the society where the aged lived and planning of their environment.
- (5) Since most of the interviewees were the students' own grandparents, they learned their intimate seniors' ways of life and senses of values.
- (6) The students acquired sound images of aged people. Therefore, interviewing the aged is effective as a method of understanding objects of gerontological nursing.

*連絡先：〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

Key Words : 高齢者 (Aged people), インタビュー (Interview)

対象理解 (Object understanding), 看護学生 (Nursing student)

教育方法 (Education method)

はじめに

現在、わが国では核家族化が進み、入学してくる看護学生の多くは、日常生活において高齢者と接する機会が少なくなっている。老年看護学において看護の対象である高齢者をどのように理解させるかが重要な課題であり、そのための教育方法の工夫が必要である。本研究の目的は、高齢者理解の方法としてインタビューを用いた学習の効果を明らかにし、その結果から高齢者を理解するための教育方法を検討する際の資料とすることである。

対象と方法

1. 対象

対象は、高齢者にインタビューを行い、研究に同意の得られたA短期大学看護学科1年次生50名。

2. インタビューについて

老年看護の対象である高齢者の多くは在宅で元気に生活している。したがってインタビューは、65歳以上で元気な高齢者を対象に行うことを課し、時期は、老年看護学概論開始後の冬季休業中に実施した。高齢者へのインタビュー内容は、①過去の印象に残った出来事と、その時考えたことと、思ったこと、②現在の生活、③今後どのように過ごしたいか、であった。インタビュー時の注意事項として、プライバシーの保護、話したくないこ

とは話す必要がないなどを高齢者に伝え、高齢者の前で記録や録音をする場合は必ず了解を得ること、高齢者の疲労を考慮するなど学生に事前説明した。インタビュー後、インタビュー内容に加えインタビューをとおして高齢者について考えたこと、感じたこと、及びインタビューが自分自身の高齢者観にどのように影響したかなど学習成果をレポート用紙に自由記述し提出させた。

3. 分析方法

今回は学生の学習成果を分析対象とした。提出されたレポートを文（一文一意味）で区切り、記録単位とした。その内容をコード化し、それを同質性・異質性により分離・統合しサブカテゴリーを抽出した。サブカテゴリーについても同様の作業を反復し、カテゴリーを抽出した。その過程において、老年看護学の教員3名で協議し、意見が一致するまで繰り返し行った。

結果

1. インタビューした高齢者の背景

インタビューした高齢者と学生との関係は、祖父母38名（76%）、祖父母以外の血縁者4名（8%）、他人7名（14%）であった（図1）。性別は、男性15名（30%）、女性35名（70%）（図2）。年齢は、75歳未満が23名（46%）、75歳以上が27名（54%）であり、平均は、75.7歳であった（図3）。

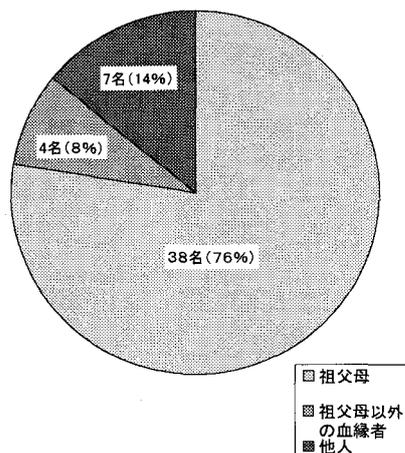


図1 インタビューした高齢者と学生との関係

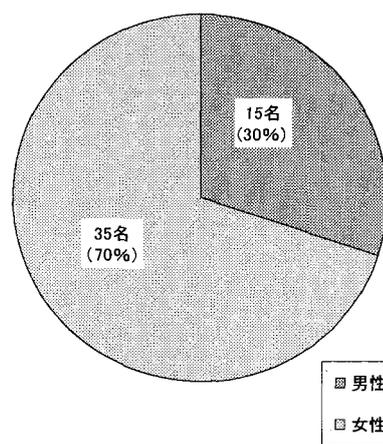


図2 高齢者の性別

全員、自宅で生活している。

2. インタビュー所要時間

インタビュー所要時間は60分未満は18名 (36%) であり, 60分以上120分未満が22名 (44%), 120分以上が7名 (14%) であった (図4). インタビュー所要時間の平均は69.7分であった。

3. 高齢者の過去の印象に残った出来事

過去の印象に残った出来事として, 戦争体験を上げた者が31名 (62%), 次いで夫の死が8名 (16%), 生活史が7名 (14%), 子育ては5名 (10%) などであった (図5).

4. 学生の学習についての内容分析

高齢者インタビューによる学習成果を分析した結果, 209記録単位, 74コードが抽出された. そして, 32サブカテゴリ, 14のカテゴリを抽出した.

サブカテゴリ名は「 」, カテゴリ名は

『 』で表記する。

カテゴリの内容は、『高齢者が過去に体験してきたこと』, 『現在の高齢者とはこんな人』, 『高齢者の役割・存在価値』, 『高齢者の個性』, 『高齢者に対するイメージの変化』, 『生きてこられた時代の中で価値観が育まれる』, 『コミュニケーションの重要性』, 『既習学習の確認』, 『若い・死に対するイメージの変化』, 『老々介護のイメージの変化』, 『高齢者と話をするのは役に立つ』, 『高齢者への対応・接し方, ケア』, 『これからの展望』, 『学習 (話しを聴く・本を読む)』, 『高齢者に対して望ましい社会・環境作り (制度を含む)』であった。

14カテゴリの中で高齢者理解に関するカテゴリは、『高齢者が過去に体験してきたこと』, 『現在の高齢者とはこんな人』, 『高齢者の役割・存在価値』, 『高齢者の個性』, 『高齢者に対するイメージの変化』, 『生きてこられた時代の中で価値観が育まれる』の5カテゴリが抽出された。

『高齢者が過去に体験してきたこと』のサブカテゴリは「戦争体験や昔の食生活を知った (3)」, 「高齢者はいろいろな経験をしている (8)」であった。

『現在の高齢者は, こんな人』のサブカテゴリは「過去の体験を糧に, 生き生きと前向きに生きている偉大な人 (29)」, 「不安やつらさを抱え, 社会とのつながりの少ない人 (7)」, 「加齢による変化と共に生きている人 (5)」であった。

『高齢者の役割・存在価値』のサブカテゴリは, 「高齢者は人生の先輩としての役割をもち, 尊敬すべき存在である (17)」, 「高齢になっても

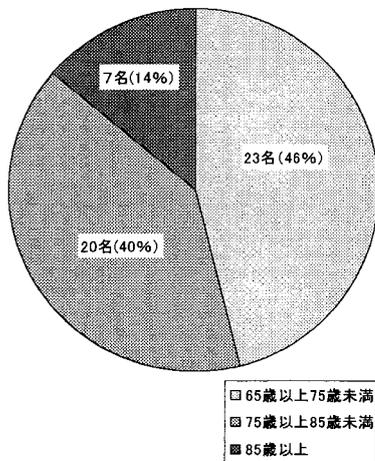


図3 高齢者の年齢

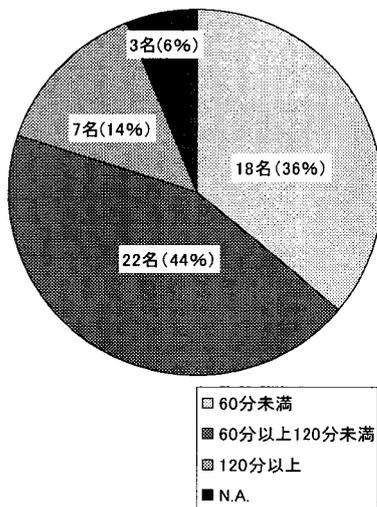


図4 インタビュー所要時間

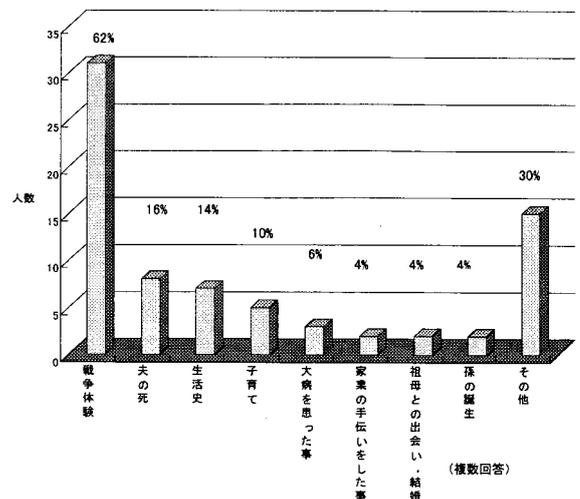


図5 過去の印象に残った出来事

人間の価値は下がらない (1)』であった。

『高齢者の個別性』のサブカテゴリーは「高齢者にも個人差がある (6)」, 「個別性を大切にす (4)」が得られた。

『高齢者に対するイメージの変化』のサブカテゴリーは「高齢者イメージが否定的から肯定的に

変化 (28)」, 「高齢者イメージの変化はなかった (1)」であった。

『生きてこられた時代の中で価値観が育まれる』のサブカテゴリーは「価値観を知ることは重要である (2)」, 「時代背景によって, 私と高齢者の価値観は異なる (7)」であった (表1)。

表1 高齢者インタビューによる学生の学習内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	記録単位	
高齢者が過去に体験してきたこと	戦争体験や昔の食生活を知った	戦争の話から戦争の無惨さ, 食物の大切さ, 命の大切さを学んだ	2	
		昔の食生活を知った	1	
	高齢者はいろいろな経験をしている	戦争という恐怖を体験している	4	
		高齢者はいろいろな苦勞を体験している	3	
現在の高齢者とは, こんな人	過去の体験を糧に, 生き生きと前向きに生きている偉大な人	高齢者は生きがいをもっている	6	
		高齢者はいろいろな経験をしており, すごい	5	
		高齢者は楽しみをもっている	3	
		誰かと会い, 話している人は生き生きしていると感じた	2	
		高齢者は今の日本を築いた強い人	2	
		高齢者は何でも知っている	1	
		高齢者は, 多くの経験を積み, 様々な視点でみられる	1	
		高齢者は偉大である	1	
		高齢者は支える存在	1	
		高齢者は働く意欲がある	1	
		高齢者はくよくよしない	1	
		高齢者は加齢による変化を受けとめ, 対応している	1	
	不安やつらさを抱え, 社会とのつながりが少ない人	高齢者は病気や不安を抱えて生活している	5	
		高齢者は不安やつらさを持って生きている	1	
		高齢者は他人との関わりが少なくなってくる	1	
	加齢による変化と共に生きている人	高齢者の特徴 (知能, 精神, 身体)	3	
		高齢者の心身の変化がわかった	2	
	高齢者の役割・存在価値	高齢者は人生の先輩としての役割をもち, 尊敬すべき存在である	高齢者は尊敬すべき存在で, 学ぶ事はたくさんある	8
			高齢者には生活の知恵, 戦争の愚かさ, 物の大切さを伝えるという存在価値がある	5
人生の先輩としての役割			4	
高齢になっても人間の価値は下がらない		年をとっても人間の価値は下がらない	1	
高齢者の個別性	高齢者にも個人差がある	高齢者は個人差が大きい (経験の違いから)	3	
		高齢者にも個人差がある	3	
	個別性を大切にす	高齢者の個別性を知り, それでよいと感じた	3	
		高齢者を個別に見ることは大切	1	
高齢者に対するイメージの変化	高齢者イメージが否定的から肯定的に変化した	介護の必要な人から元気で意義ある生活をしようとしている人に変化	6	
		暗い人から今を楽しんで生きている人に変化	4	
		弱い人から強い面や行動的な面もある人に変化	4	
		元気がない人から元気で生き生きと暮らしている人に変化	3	
		動くのが面倒な人から行動的な人もいるに変化	3	
		私達とは違う存在から同じ人に変化	2	

		口うるさい人から耐えてきた人に変化	1	29
		厳しい人から優しい人に変化	1	
		喜びや楽しみがない人からそうではない人に変化	1	
		暗い人からいろいろな人がいるに変化	1	
		弱い人からいろいろな人がいるに変化	1	
		付き合いが少ない人から付き合いが続いている人に変化	1	
	高齢者イメージの変化はなかった	高齢者イメージの変化はなかった	1	
生きてこられた時代の中で価値観が育まれる	価値観を知る事は重要である	生活観・価値観を知る事は大切	2	9
	時代背景によって、私と高齢者の価値観は異なる	私と高齢者は、人生、考え、生活に大きな違いがある	6	
		時代背景によって人間の生き方・考え方は左右される	1	
コミュニケーションの重要性	高齢者の気持ちに近づくための手段としてのコミュニケーション	話をするとその人の気持ちに近づける	6	10
		コミュニケーションの大切さを実感した	2	
		祖母の見たことのない面にふれてよかった	2	
既習学習の確認	学習した事を実感した	身体面・心理面・社会面が連結していると改めて知った	2	5
		授業・本で習った事を実感した	2	
	勉強になった	高齢者の特徴が、わかりやすく勉強になった	1	
若い・死に対するイメージの変化	若い・死に対するイメージの変化	老いることが嫌でなくなった	3	5
		死の受容	2	
老々介護のイメージの変化	老々介護のイメージの変化	老々介護のイメージの変化	1	1
高齢者と話をするのは役に立つ	高齢者の経験談を聞くのはためになる	高齢者の経験談を聞くのはためになる	6	10
		高齢者の経験談を聞くのは楽しい	2	
		幸せである事の気づき	高齢者の経験談を聞いて、自分が今、幸せであることに築いた	
高齢者への対応・接し方、ケア	高齢者看護の要点	人生の先輩として、尊敬の気持ちで、対等な一人の人として接したい	3	16
		個別性のある看護の必要性	2	
		偏見を持たず、向き合えるようになりたい	1	
		高齢者の立場に立って、考える事、対応することが必要	1	
		高齢者は食べ物を大切にしますが、嗅覚が低下するため腐敗に気づかないため注意必要	1	
	高齢者には家族・仲間が大切である	高齢者には、家族・仲間の支えが大切	3	
	高齢者に感謝し、大切にすること	高齢者には会話が必要である	1	
		高齢者を邪魔者にせず、大切にしたい	3	
		高齢者にもっと感謝すべきだ	1	
これからの展望	自分の生き方への示唆	インタビューで学んだことを自分の人生に活かしたい	14	20
		看護への活用	インタビューで学んだことを看護に活かしたい	
学習（話を聴く・本を読む）	多くの高齢者の話を聴きたい	もっと多くの人の話を聴きたい	4	8
		祖母といろんな話がしたい	3	
		さまざまな生き方・考え方を知りたい	人との関わりや読書を多くし、様々な人の生き方・考え方を知る必要がある	
高齢者に対して望ましい社会・環境作り（制度を含む）	高齢者の住みやすい町づくり	高齢者のために住みやすい町づくりをしていく	6	16
		施設	2	
		生活環境	1	
		住みやすい社会	1	
		住みよい町づくりのためには高齢者の意見を聞く	1	
	制度の改革	一人一人のニーズに合った介護が必要	2	
		年をとっても夢がもてる制度や考え方に変わる	1	
高齢化は身近なもの	高齢化を身近なものとして考えていかなければならない	1		
苦勞のない生活	苦勞のない生活を送って欲しい	1		
			209	209

考 察

1. 高齢者理解について

学生は高齢者を過去の体験を糧に価値観を育み、生き生きと前向きに生きている偉大な人と捉え、高齢者の役割や存在価値を認め、個別性も理解している。このような高齢者理解に至ったのは、高齢者を眺めるだけでなく、学生自身がインタビューを行ったことによると考える。そして、インタビューの内容として、高齢者に過去の印象に残った出来事を聴かせていただいたことが関与したと考える。印象に残った過去の体験として戦争体験が多く、夫の死をあげた高齢者もいた。これらの体験は、高齢者にとっての“至底体験”と言える。木下¹⁾は「至底体験とは、長い人生のなかで遭遇したさまざまな苦難や苦境、挫折や絶望をいろいろな人に助けられながらどうにかのりこえてきた体験からその人が身につけてきた生きていく知恵」と定義している。そして、高齢者に至底体験を語ってもらうことが高齢者の“強い自分”を引き出すことになる、と述べている。学生は、高齢者の至底体験を高齢者と一緒にたどることにより、高齢者の自尊感情の源を知ることができ、高齢者を「過去の体験を糧に、生き生きと前向きに生きている偉大な人」と認識したと考える。同時に、高齢者が至底体験から何に価値を見いだしているのかも知ることができたと推測できる。そのことから、高齢者の過去の体験を知るとは、高齢者の生き方・価値観の理解に有効であると考えられる。

2. 高齢者への興味・関心

詫摩²⁾は、青年の友達つきあいについて「全体的に楽しく、愉快的仲間つきあいをしているようである。しかし相手の心の中に踏み込んで深く真剣なつき合いをしているものは少ない。相手の立場を考えて距離をおいているが、そのような心の背景に人間一般に対する不信感がひそんでいるようである」と述べている。このような深い人間関係をもつことが苦手な学生には年代の異なる高齢者と関わる機会はほとんどないと推測できる。今回の対象学生にも同様の傾向がみられる。このような傾向をもつ学生が高齢者にインタビューをした結果、10名(20%)が「高齢者の経験談を聞くのは楽しい」、「高齢者の経験談を聞くのはためになる」と答えており、8名(16%)が、「多くの高齢者の話が聴きたい」や「さまざまな生き方・考え方を知りたい」と高齢者に対して興味・関心をもっている。これは、インタビューによって高

齢者の過去の印象に残った出来事を直接聞き、自分達が経験していない体験をしている高齢者に興味を持ったものと思われる。大段³⁾は「人間関係における態度の学習は知的訓練ではできない。態度の修練は体験学習によって可能になる」と述べている。犬塚⁴⁾は、体験学習の効果として「体験から得られる『そうだったのか』という新鮮な発見や気づきは学習への興味を深めたり動機づけになったりする」ことをあげている。これらのことから高齢者に直接インタビューするという体験が、学生の高齢者に対する興味・関心を引き出したと考える。また、話していただいた内容が年代の異なる学生には、新鮮であったことも高齢者に興味・関心をもったことと関連していると思われる。いずれにしても、看護者にとって、看護の対象者に興味・関心を持つ態度は必要不可欠である。老年看護の対象者である高齢者に興味・関心を持ったことは意義がある。したがって、インタビューにおいて、学生が体験していない経験を高齢者に語ってもらうことは、学生達が高齢者に興味・関心を持つことに役立つといえる。

3. 高齢者を理解するための教育方法

高齢者を理解するための教育方法として高齢者疑似体験が広く実施されている。高齢者疑似体験から学生が学べる内容は、加齢による身体的変化やそのことから起こる精神的不安や社会生活を行う困難さである。このことから学生は高齢者への援助の必要性を見いだす。そして、高齢者を援助の必要な人と認識しやすい。それに対し、インタビューから学生が学んだことは、過去の苦しい時代を乗り越えた体験談から精神的側面、特に生き方・価値観の理解であった。そのことから、学生は高齢者を生き生きと前向きに生きている人、存在価値のある人と認識することができる。

木下⁵⁾は「老人とはいかなる社会にあっても両義的な存在なのである。この両義性は、知恵と経験に長け、指導者としての『賢老人』と、歯は欠け落ち鼻水をたらしながらヨボヨボと歩く、他者に依存しながら生かされている『老衰人』という形でイメージできよう」と述べている。体験学習である高齢者疑似体験と高齢者インタビューは、この両義性を学ぶことができる。体験学習を取り入れることは、学生がまだ老年期を体験していないことと高齢者とのふれあいが少ないことから現代の学生への教育に必要である。体験学習を取り入れる際に、その学習内容から考え、高齢者理解

のための教育方法を組み合わせて取り入れる必要性が示唆された。

4. 社会、環境づくり

高齢者インタビューを通して学生が、高齢者に対して望ましい社会・環境作りに目をむけることができたことは評価できる。高齢者も社会の中で生きており、老年看護学においてそこに目を向けさせることは重要であるが、老年期を体験していない学生には難しい。しかし、インタビューでひとりの高齢者の現在の生活を聴かせていただくことにより、身体的側面・精神的側面の理解にとどまらず、社会的側面を捉えることができた。さらに、高齢者の住みよい町づくりや制度改革を考える手がかりとなったと考える。

5. 祖父母について

インタビューがきっかけで学生の身近な高齢者である祖父母の今まで知らなかった面に触れ、生き方・価値観を知ることができた。その結果、家族内での役割を果たす人として見ていた祖父母をひとりの人としてみるようになった。そのことから、学生は自然に祖父母を人として尊重できるようになるのではないかと考える。

6. 高齢者インタビューを老年看護学概論の中に位置付けることについて

老年看護学概論の中で対象理解は重要な位置を占めている。健康障害のある高齢者ではなく、健康な高齢者のイメージをこの時期にはまず、学生にもってもらいたい。筆者らの先行研究⁶⁾においても老年看護学概論開始前の時期には、高齢者に対してマイナスイメージを抱いている学生が多い。学生が健康な高齢者イメージを持つことができたことから、高齢者インタビューは老年看護学概論における対象理解の方法として有効である。

今回、看護学生が老年看護の対象である高齢者を理解するための方法としてインタビューを行い明らかになったことは、高齢者を理解するためには過去の印象に残った出来事を語ってもらうことが効果的ということであった。学生はインタビューによって、高齢者の過去の体験に触れ、過半数の学生は、高齢者を肯定的イメージで捉えていた。さらに過去の体験から個性があること等を理解しており、高齢者に否定的イメージをもつ傾向のある現代の学生にとって高齢者理解のためのインタビューは有効であったと考えられた。さらに、この高齢者を理解するための方法は、看護学生だけでなく一般の方、皆

がそれぞれの周囲の高齢者を理解するために効果的な方法といえる。また、今後は高齢者のインタビュー体験にも着目し、高齢者理解のための教育方法を深めたい。

結 論

看護学生の高齢者理解の方法として的高齢者インタビューの学習効果を検討する目的で、看護学生が高齢者インタビューから学んだ内容を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 高齢者を過去の体験を糧に価値観を育み、生き生きと前向きに生きている偉大な人と捉え、高齢者の役割や存在価値を認めている。また、個性も理解している。
2. 高齢者への興味・関心が高まった。
3. 高齢者の過去の体験を知ることは、高齢者の生き方・価値観の理解に有効である。
4. 高齢者の生きている社会や環境づくりに目を向けることができた。
5. インタビューの対象には祖父母が多かったことから、身近な祖父母の生き方・価値観を知ることができた。
6. 健康な高齢者イメージを持つことができたことから、高齢者インタビューは老年看護学概論における対象理解の方法として有効である。

文 献

- 1) 木下康仁 (1993) “老人ケアの人間学”, 医学書院, 東京, p142.
- 2) 詫摩武俊 (1993) “青年の心理 三訂版”, 培風館, 東京, p89.
- 3) 大段智亮 (1990) “積極的傾聴 I”, サンルート看護研修センター, p207.
- 4) 犬塚久美子 (2000) 体験学習, “わかる授業をつくる看護教育技法3 シミュレーション・体験学習” (藤岡完治, 野村明美編), 医学書院, 東京, p142.
- 5) 木下康仁 (1989) “老人ケアの社会学”, 医学書院, 東京, p25.
- 6) 滝川由美子, 吉本知恵, 横川絹恵 (1999) 看護学生の高齢者イメージの変化—老年看護学概論の授業前・後の比較—. 香川県立医療短期大学紀要 第1巻: 51-60.

受付日 2002年12月2日